

## くまがや風土記 8 水車の始まりと遺跡

熊谷市史編さん室 新井 端

高山彦九郎(1747~1793)は勤皇思想家として活躍した人ですが、母方の親族が現在の妻沼地域に住んでいたこともあり、長旅の前には度々熊谷地方を来訪しています。また、全国を巡る途次でその足跡と見聞を細かく記録に残しています。庶民の生活や古跡などにも関心を向け、『武州旗羅廻』では西別府安楽寺の記録を残しています。

安永四年(1775)の「忍山湯旅の記」では桐生の街で紡績のために水車を利用している様子を見て「水車を以て糸を繰る」と記しています。

天保二年(1831)、三ヶ尻へ訪れた渡辺崋山(1793~1841)は三ヶ尻村の風土や地誌を『訪瓶録』や『客座録』に記録しています。地元民に聴きとり、由緒の場所には直接足を運んでいます。三ヶ尻龍泉寺から荒川を眺望して「練り絹の押延べたようなつやのある輝きだ」と記しています。同書には三ヶ尻村内の風景画も載せられています。また、桐生からの見聞を『毛武遊記』にまとめ、やはり紡績に使われる水車を「わがこころ甚たのしむ」と目を留めています。

この二人は江戸時代の紀行家としても抜群の人物で、熊谷市域の記録を残した点では恩人とも讃えられます。ただ、本文で扱う水車に関しては、熊谷市域での記録は見当たらないようです。二人の目には水車小屋の風景は映らなかったのでしょうか。それとも注意の外にあったのでしょうか。先の紀行文からすると、それは考え難いことのように思います。

市域では荒川左岸に奈良、玉井、大麻生、成田の各用水路と備前渠が幹線用水路としてありました。水路沿いには奈良・6基、玉井・8~9基、大麻生・9基、成田・6基、備前渠・1~2基の水車が数えられました。

渡辺崋山の訪れた三ヶ尻は、奈良堰・玉井堰・大麻生堰・右岸側の御正堰と取水口に近く、村の内外を用水路が走っていました。崋山も、この用水路を風景の特徴として、先の紀行文やその挿画に記録しています。

高山彦九郎についても同様で、市域東部の久下ー熊谷宿ー奈良ー須戸ー弥藤吾ー妻沼台の往路近辺では、久下、佐谷田、奈良で10基前後の水車を数えますが、記事には見えません。

崋山・彦九郎の記事に見えない理由は、両者が全く気に留めなかったというより、当時は、未だ水車小屋が設置されていなかったと考えることが妥当です。

現在のところ、市内最古の水車の記録は、伝承ながら久保島の水車で宝暦年間中(1751~1763)と云われますが、他のほとんどの水車は江戸時代末期以降

の成立と云われているので、崑山・彦九郎の時代以降に多出すると思われます。

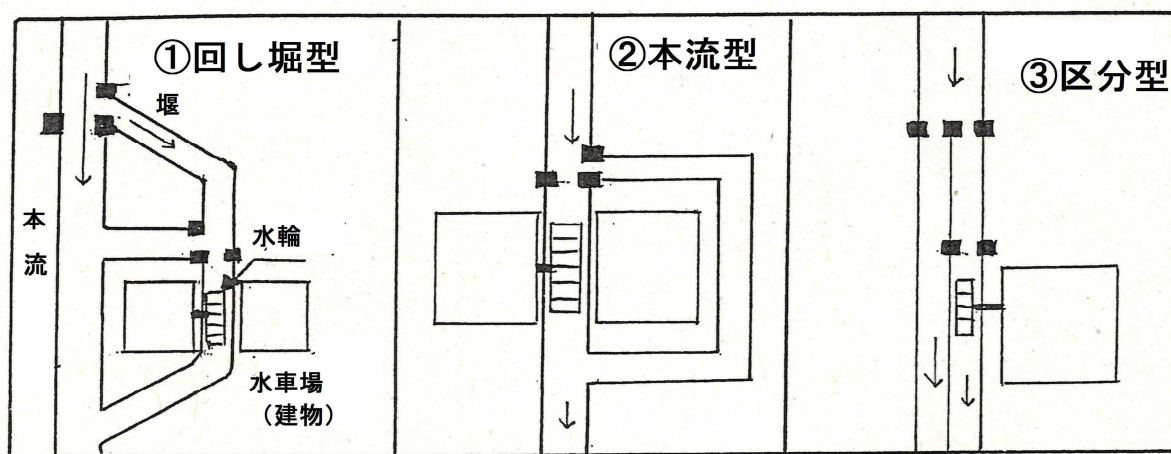
市史編さん室では、少量ながら水車関係の文書を発見していますので、今後時期を絞り込むなど検討を進めていきます。また、現地報告として水車場の旧在地の一つを紹介します。

現在の奈良堰用水路が、JR 高崎線・国道十七号線を通る新堀・高柳地区の住宅街にコンクリート貼りになった水路があります。以前の奈良堰用水路で、今は「古堀」と呼ばれ、現役からは遠ざかっています。ここには、『荒川総合調査報告書』埼玉県 1988』によると「高柳の水車」がありました。かつての平面配置は、南北方向に真直ぐ流れる用水路が敷地を巡るように西側に張り出し、一方で水路方向の分水路を敷地に通すものです。(図・本流タイプ) この配置は、真直ぐ流れる水流の勢いを減衰させずに水車を止めるときには分水口を閉じて本流を迂回させるために必要な工夫です。

既に、分水路は埋められて残りませんが、東側の市道との間に五間×七間規模の水車建物があつたとされます。水輪を、分水路に掛けた下掛け式の水車と思われます。精米、製粉が中心の経営で、地元農家の利用が主体であつたようです。活動の時期は記憶だよりですが、明治期から昭和二十年代までの間であつたようです。この水車に関しては記憶に留める方が多数おられるので、調査を続けたいと思います。

高柳の水車跡地のような「産業遺跡」は、水車の廃業やその後の水路改修などによりほとんど残っていないため、希少な場所ともいえます。今、水路にかかる橋から眺めても、かつての姿を考えることは難しいかもしれませんが、水路がなぜ曲がっているのだろうと注意すると、瀬音とともに水輪の発する廻転音や搗臼の響きを想像できるかもしれません。

(熊谷市公連だより 第 14 号 平成 24 年より)



水車水路類型